〔3〕課題学習による実践

(1) 昨年度までの実践

中学部では、一昨年度、昨年度と2年間、コミュニケーションに関わるつけたい力のうち読む・聞く力（理解力）と、話す・書く力（表現力）の育成を課題別学習に位置づけ、週3時間設定して実践してきた。理解力や表現力の育成の基本は、基礎学力（国語・数学）の習得にあるという考え方にたち、その習得に力を入れた。グルーピングは習熟度別編成とし、その中で繰り返しや仲間意識・競争意識の喚起による学力の定着・向上をめざすと共に、基礎学力を実際の生活の中に生きて働く力とするため、題材選びや学習の場の設定に工夫をしてきた。またグループの人数は、コミュニケーションの拡がりが期待できる規模ということから5～6名とした。しかし、個別の対応がより効果的だと判断した生徒については、マンツーマンで指導に当たった。2年間の実践を通して、選択肢を選ぶことで、自分の意思表示をするようになった子、絵カードと文字のマッチングで、ひらがな13文字が読めるようになった子、意思表示が単語から2語文、3語文に拡がってきた子等、少しずつ成果が認められるようになってきた。

その一方で、

- 特設した時間の中での指導では、学習内容が日々の生活に直結しにくい。
- 必ずしも学級担任が指導に当たれないため、習得したことを生活の中に生かしたり、家庭との連携指導に結びつけたりすることが難しい。
- 生徒によっては、基礎学力の習得より優先する課題（からだのこなし・相手の認知・手指の巧緻性等）を抱えている。

といった新しい課題が浮き彫りとなってきた。

(2) 本年度の実践

① 課題学習の考え方

2年間の実践を見直し、本年度は次のような考え方にたって取り組むことになった。

- コミュニケーションに関わるつけたい力を基礎学力の側面からのみ追求するのではなく、養護・訓練的な側面からも追求し、より実践的な力としていく。
- この時間は、コミュニケーションの力や意欲を高めることをねらいとして、個々の生徒が今現在抱えている最優先課題に取り組むものとする。従って、養護・訓練的課題に取り組む生徒、基礎学力の向上をめざした課題に取り組む生徒、コミュニケーションの方法を学習する生徒、身辺処理の技能習得をめざす生徒等、個々が持つ最優先する課題に向かって、生徒はさまざまな取り組みをすることになる。
- 昨年までの課題別学習を課題学習と呼びかえ、個々の課題に視点をあてた学習としての性格を明確にする。生徒が自己の課題と目標、学習の方法を理解し、主体的に取り組めるように配慮する。
- 学習時間を毎日帯にとり、継続して取り組むことができるようにする。

・個別学習を基本とするが、生徒の実態によってグループ指導をすることもある。

・指導には学級担任が当たり、生徒の日常の生活との関わりや家庭との連携指導にも配慮する。

② 指導計画

生徒の課題を基礎学力と養護・訓練の２つの側面からとらえ、課題学習として継続的に取り組む内容を選定した。次の表は１年生の指導計画である。尚、２・３年生も同じ観点で計画を立案している。

指導計画（１年生）

(A) 領域別の実態			D男	U男	K男	H子	Y子
養護・訓練	身体の健康						
	心理的適応			自己中心的			場の認識困難
	環境の認知				認知概念未形成	感覚の受容未熟	
	運動・動作		筋力が弱い。	姿勢の保持未熟		身体意識未確立	排泄の未自立
	意思の伝達		言語やや不明瞭		伝達能力未熟		
基礎学力	国語	言語・文字の習得	小３の漢字の習得４割程度	小２の漢字の習得６割程度	簡単な文のなぞりや視写ができる。	筆圧が弱く、書いた文字が読みにくい。	小３の漢字の習得６割程度
		理解・表現	簡単な文章が書けるが、間違いが多い。	文字を書くことが苦手で、主述が整いにくい。	発音が不明瞭でささやくような声を出す。	話ことばと書きことばを混同して使う。	簡単な文の読解可能。丁寧な文字が書ける。
	数学	数・計算	100までの加減法を筆算でする。確実さに欠ける。	20までの加減法が半具体物を使ってできる。	数字カードを順序よく並べる。13まで数える。	１対１対応で10まで数える。50までの数唱可能	100までの加減法ができるが単純なミスが多い。
		お金・時計	時計が分針までほぼ正確に読める。	分針が読める。電卓で簡単な買物ができる。	（把握困難）	生活と結びついた時刻のみわかる。	分針が読める。
(B) 課題学習の内容 ※ ◎は養護・訓練課題への取り組みである。			・小2程度の漢字の習得と作文 ・適切な応答 ・100までの計算 ・電卓で1000円までの計算 ・筋力の強化（スクーターボードを使って）	・小１～小２程度の漢字の習得と作文 ・よく聞いて発言する態度 ・100までの計算 ・電卓で1000円までの計算	・なぞり書き ・視写 ・20までの数唱 ・3までの数概念 ◎指導者と楽しく関わりながら歌遊びや積み木トランプ等に落着いて取り組む。	・小1程度の漢字の習得と作文 ・相手の顔をみて発言する態度 ・10までの数 ・日記の見直し ◎筆圧の強化（カーボン紙の利用、紙ちぎり）	・小4程度の漢字の習得と作文 ・話を聞く態度 ・100までの計算 ・電卓で1000円までの計算

実践に当たっては、以下を留意事項とした。

・国語・数学の基礎学力の習得は、プリント学習とする。課題プリントは個々の実態に応じたものを準備し、自主的に取り組ませる。プリントは１枚ごとに担任がチェックし、指導する。また、同じ程度の内容のプリントを家庭学習でドリルさせ、定着を図るようにする。

・筋力の強化をめざしたスクーターボード漕ぎは、毎日廊下（40メートル）を２～５往復とする。訓練のねらいと方法を事前によく説明し、中途半端な取り組みをしないように意識づける。正しい方法でできているかどうかのチェックをきちんとし、訓練の効果をあげるようにする。

・「態度」については、毎日の生活全般の中での指導と密接に関連づける。

(3) 実践事例

① 手足の筋緊張を高めることをねらった実践

a 実態及び課題

H子は全体的に身体の筋緊張が弱く、姿勢が崩れやすくて顔を下に向けていることが多い生徒であった。重い物は初めから持とうとしないか、持っても支え切れず手を開いて落としてしまった。指先を使った作業には力が入らないばかりか、動いている指先に視線が集中せず、目と手の協応動作ができていないと感じた。文字の筆圧がなく、紙の上を滑るような字形になっていた。人物画は手と足を波のように描くのが特徴であった。このことから、養護・訓練の課題として、・指先の力をつける。・筆圧をつける。・感覚として回転刺激を入れる。(回転後眼振なし) を考えていくことにした。

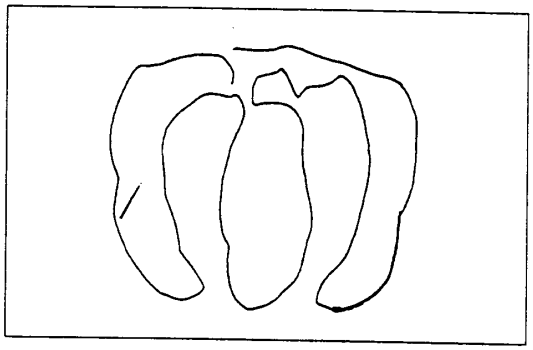
b 指導方針

まず、4月～7月は、「なぞり絵」をすることで目と手の協応動作をねらい、筆圧を高めるために簡単に線が写らないようにした。絵とカーボン紙の間にアクリル紙をはさみ、かなり手に力を入れたと感じるように工夫した。飽きないために絵は毎日違う物にした。次に、9月からは「紙ちぎり」に取り組んだ。指先に力を入れることと、指先に視線を集中させることをねらった。このちぎった紙の利用についても考え、ちぎり絵につなげることにした。

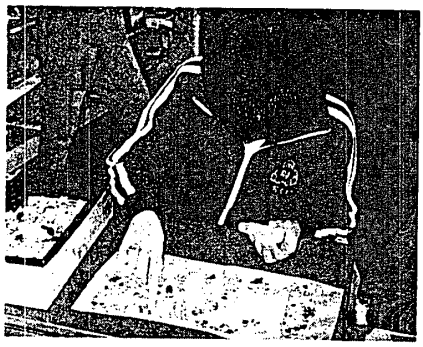
この他に、筋の緊張を高めたり、前庭感覚を刺激したりする用具の利用を考えた。

c 指導の経過

ア 筆圧のついた「なぞり絵」(かぼちゃ)



イ ちぎった紙を使っての12月表示を作成中のH子



4月当初のなぞり絵は、「もう1度して」と言うと、自分を全て否定されたかのように身体を崩して泣き、喚いた。1度目は、2度目は……と比較を目で見させることで、「もう1度してみよう」と言う意欲を起こすようになった。9月に紙ちぎりを始めた頃は紙を縦に引き裂くだけであったが、今では指先で1㎝四方の大きさに細かくちぎっている。回転盤は自分で工夫して、机の足に触って身体に回転方向を起こしている。回転刺激を受けることについては今のところ変化なしである。

d 考察と今後の課題

朝の短い課題学習の時間に自分の苦手とすることに取り組み、いつの間にかする喜びに変わっていった。緊張を高めることは、集団適応として「人の話を聞く態度」につながり、我慢する強さにもなってきた。今後は、自分の持ち味を大事にしながら、気づき行動する子に育っていくことを願う。

② 日記の直しを通して、正しい助詞の使い方を身につけながら表現する喜びを高める実践

a 実態及び課題

N男は自閉症である。感情が豊かで、よく笑い、よく怒り、よく泣き、そして、とても世話好きである。思いが通らないといこじになって落ち込んでしまうことも徐々に減り、友だちとの関わりの中で、自分の気持ちをおさえたり切り換えたりすることもできるようになってきた。自分の気持ちを伝えたいという意欲があり、意見を言ったり日記の発表をしたりすることは積極的である。しかし、話し言葉も書き言葉も助詞の使い方に誤りがあるため、相手に意味が伝わらないことが多い。正しい助詞の使い方を身につければ、今よりももっとやりとりがスムーズにいき、N男のコミュニケーションの力になるのではないかと考えた。

b 指導方針

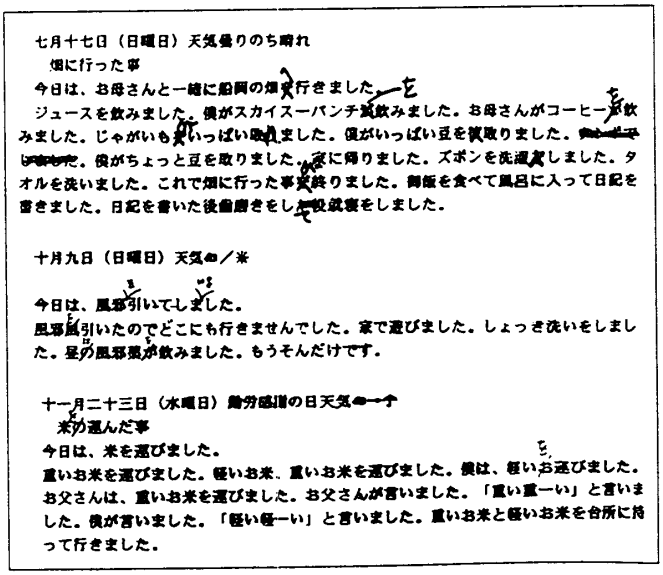
毎日の朝の会での日記発表は、N男は積極的である。友だちがちゃんと聞いていてくれるかということが気になり、質問が出ないと日直をさしおいて、自ら「○○君、質問してくださいよぉ」と言ったりする。しかし、発音が不明瞭な上に、助詞の使い方に誤りが多く、聞いていても何を言っているのかわからないことがある。そこで、朝の会までに日記の直し（助詞）をして、訂正した文を読む、という学習を続けることにした。自分の思いを自分なりの言い回しで表現するN男の文章は、個性的で味がある。できるだけその味わいを損ねないようにし、助詞を訂正することで文意が通るようにした後、それをN男がワープロで打ち直す、という形で取り組んだ。

c 指導の過程

小3程度の漢字が読み書きできるN男は、好きなワープロで自由に変換して日記を打っている。書字の方が速いが、ワープロが好きでもあるし、画面を見ながら一文字ずつ訂正していく作業は集中して取り組むことができる。担任に赤ペンでチェックをしてもらうと、いそいそとワープロの前に座り、打ち直しをする。訂正した日記は、まちがいがないという自信があるためか、発表をする時も自信を持って大きな声で読むことができるようである。

d 反省と今後の課題

遅々たる歩みではあるが、助詞のまちがいが減ってきた。また、聞く人を意識するようになり、内容がワンパターンでなくなってきた。自分の日記を見直す学習に継続的に取り組んだ成果ではないかと考える。人に話したい、聞いてもらいたいというN男の意欲を大切にして、今後も、できるだけ人にわかってもらえる文章表現ができるように指導していきたい。


七月十七日（日曜日）天気曇りのち晴れ
畑に行った事
今日は、お母さんと一緒に船岡の畑へ行きました。
ジュースを飲みました。僕がスカイスーパンチを飲みました。お母さんがコーヒーを飲みました。じゃがいもをいっぱい取りました。僕がいっぱい豆を取りました。僕がちょっと豆を取りました。家に帰りました。ズボンを洗濯しました。タオルを洗いました。これで畑に行った事を終りました。御飯を食べて風呂に入って日記を書きました。日記を書いた後掃きをしました。就寝をしました。

十月九日（日曜日）天気曇／＊

今日は、風邪引いてしまました。
風邪風引いたのでどこにも行きませんでした。家で遊びました。しょっさ洗いをしました。昼の風邪薬が飲みました。もうそんだけです。

十一月二十三日（水曜日）勤労感謝の日天気曇一个
米が選んだ事
今日は、米を選びました。
重いお米を選びました。軽いお米、重いお米を選びました。僕は、軽いお選びました。
お父さんは、重いお米を選びました。お父さんが言いました。「重い重ーい」と言いました。僕が言いました。「軽い軽ーい」と言いました。重いお米と軽いお米を台所に持って行きました。

～N男の日記より～

③　物語の読み聞かせを通してイメージや情緒を育て、コミュニケーション意欲を高めた実践

a　実態及び課題

Ｂ男は、一語文が多いが、動詞を使った二語文や疑問文・要求・命令といった表現もできる。無口な傾向にあり、会話は小声で発音不明瞭である。内言語はあるが、これを表現することが少ない。

発達的には２歳～３歳のレベルにあり、初期言語習得の基礎である情動活動や探索活動を十分に保障し、イメージや認識の世界を拡げていくことが重要な時期と考えられるが、一方では、表現したい欲求や意欲を高め、自分を表現することの楽しさ（ことばを含めて）を引き出したい生徒である。

b　指導の方針

Ｂ男の関心が高く、昨年より取り組んできた「物語の読み聞かせ」を通して、イメージをふくらませ空想の世界に遊びながら情動を育てコミュニケーション意欲を高めたいと考えた。また、物語好きなＣ男といっしょに学習することにより、Ｃ男の活発な表情やことばを刺激にしたいと考えた。

c　指導の経過

紙芝居「みつばちマーヤのぼうけん」は、大好きな物語であった。最初はよそ見が多かったが、くり返し読むうちに絵と話に集中できだし、しだいに表情や動作が豊かになってきた。これらに伴いつぶやきが多くなり、回を重ねるごとに、つぶやきが生き生きとした大きな声に変わってきた。笑い声、感嘆の声、怒りの声、やさしい声とことばに感情がこもってきた。（ブーン・ブーン。エーイ・チクリ。わあ、きれい。ガリガリ。わあ、助けてくれ。助かったんだ。よかった。ありがとう。など）しまいには、ストーリーから連想される歌まで元気よく歌いだした。ストーリー中の文もところどころ覚えて、いっしょに話しだした。

紙芝居を聞くB男とC男

d　反省と今後の課題

物語の読み聞かせは、イメージや情緒をふくらませ、ことばの内容を豊かにすることができる。このことがコミュニケーション意欲を高めることにつながっていくように思われる。日常生活においても、わずかずつではあるがＢ男のつぶやきや語りかけが増えている。Ｂ男の場合は、今後もコミュニケーションの内面を十分耕していくことが重要であると考える。

(4)　実践を振り返って

毎日、スクーターボードに乗って、元気よく廊下を走っている子、縄跳びをしている子、ワープロの前で、真剣に日記を修正している子、プリント学習をしている子、紙ちぎりをしている子等、さまざまな姿が見られる。自分なりの課題に自主的に取り組むという目的意識が、生徒に定着してきたように思う。実践例にも見られるように、今年度新しい構えで取り組んだこの課題学習が、コミュニケーションの力の向上につながるという手ごたえも得ている。課題の見極め、時間確保、評価等、課題学習の核に常に目を向け、さらに充実した取り組みとしていきたい。